

業魔を斬りまくってたらいつの間にか「指揮官」と呼ばれていたんだが。

Million01

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

導師アルトリウス・コールブラウンドの死から早十年。

導師を討ち取った災禍の頭主はカノヌシと共に眠りにつき、聖隷だった少年は五大神の頂点に立つマオテラスとなる。

そして死神の男は己の舵を取り、魔女は語り部となる道を選び、一等対魔士であった少女はマオテラスを信仰するために各地を回る道を取る。

十年という月日が流れ、世界が変わっていく。

新たに現れた謎の業魔、海魔^{セイレーン}。

夜叉の業魔はそのセイレーンがいるとされる異海へと出向いていた。

目次

ロクロウ・ランゲツ	1
その男、業魔つき	13
愛宕（姉）なるもの。	23
もとに戻す方法なら一つある	39

ロクロウ・ランゲツ

— 重桜 某所の酒場にて —

酒場の席にて長身の男が酒を飲んでた。顔の右半分は少し長い黒髪で隠れ、まるでこの国出身と思わせるほど着物を着こなしている男。その傍らの壁には普通の人間とさほど変わらない長さを持つ太太刀が二振り掛けてあつた。

賑わう酒場に一組の男女が入店する。

一人は酒場には似合わぬ白いスーツを少し体格の良い男、そしてもう一人はショートカットの黒髪に金色の瞳の女性。

酒場を利用しに来るにはどちらも相応しくないかつこうをしており、店に足を踏み入れて数秒、店の中を見渡した。

そして、男がとある席へと向かつていく。それに続いて女性も後ろを歩いた。酒場ではどよめきが起きてはいるが二人にはそんなことは気にしていなかった。

「相席、よろしいでしょうか？」

そしてその席に座っている男に声を掛けた。先程の長身の男が目を閉じていた瞼をゆつくりと開けた。

「……………嗚呼」

一組の男女がかれと向かい合う様に席に座る。スーツ姿の男が飲み物を頼み彼と向き合った。

「お前か、俺に用があるという奴は」

着物を着た男がスーツ姿の男の瞳を眺めそう言った。

「私、重桜政府に所属するユウ・タチカワ少佐です」

ピクリと着物姿の男が眉を動かし、スーツ姿の男を睨みつけると自身の盃に注いであるお酒を口に移した。

「で、そのお偉いさんが俺になんのようだ？」

コトン、と空になった盃を机の上に置いて再び盃にお酒を注ぎ始める。

「……………単刀直入に言います。力を貸して頂けませんか？」

「断る」

スーツ姿の言葉に彼が直ぐに返答をする。そこで男はなぜ断るのかと聞いた。

「簡単な話だ。お前達に力を貸す理由がない。こんな剣士なんかよりこの国にいる”KAN—SEN”とやらの力を貸してもらった方がいいはずだろう？」

KAN—SEN、それは突如として現れた力を持つ少女達。その力は海を走り、魔を倒す力を持つとされている。

「それなりにお詳しいですね」

「そりゃあな、数年もここに滞在してれば詳しくもなる」

それにもう話すことはないだろう、と眩き男に席を離れるように促した。

だがそれでも男は一步も引かずスーツの内ポケットから一枚の写真を取り出し彼に見せた。

「これは重桜や鉄血、ユニオン、ロイヤル付近の海域に出現する特殊な業魔、セイレーンです」

そこに映っているのは見たことのない技術を使う白い髪に白い肌の少女だ。

「ほう……コイツが……」

彼がニヤリと笑う。まるで少しは知っているかのように。

「それでソイツを俺に見せて何がしたいんだ？」

彼の言葉に男がゴクリ、と息を呑む。ここまでは男の思惑通りだった。

彼の事は重桜でもそれなりに有名だった。数年前にパツ、とここにやってきてひたすらにこの地の業魔を斬り続ける男。それが彼だ。なんでも特殊な業魔を斬るためにやってきたのだとか。

そしてその彼が斬るべき業魔はこのセイレーンだと男は睨む。

「私がこの写真を見せたという事はもうお分かりなのでは？」

小さく呼吸を整えて男がそう呟いた。

「なる程な。お前達は俺にこいつを斬つてほしいという訳か……いいだろう、その話に乗ろう！」

彼が大きな声で答え笑う。その表情に男はホツと胸を撫で下ろした。

「それならば安心です。では、この日とこの時間にこの港に向かつてください……」
かくして、夜叉の男は新たな物語が書き記される。

「お待ちしておりました。わたくし、重桜所属の空母、大鳳たいほうと申します。以後、お見知りおきを」

後日、指定された日時と場所へと向かうとそこには一人の女性が待っていた。赤い着物を着たツインテールの黒髪の女性。大鳳と名乗った女性はニチャアと笑う。

「俺はロクロウ。ロクロウ・ランゲツだ」

ロクロウ・ランゲツと名乗った着物姿の彼は腰に手を当て、胸を張った。大鳳と似たような笑みを浮かべて。

新しい指揮官に向けた期待の笑みと新しい敵との戦闘の期待の笑み。

どちらも人間がしている顔ではない。

「話はユウ少佐から聞いています」

それなら話が早いと頷く。

「で、俺は何をすればいい?」

ロクロウは首を傾げる。さしずめこの大鳳はお目付け役か何かだろうと認識する。

「はい。まずはこの母港の中を案内させてもらいます」

ついて来てくださいと言つて母港の中へと入る大鳳にロクロウは何も言わずに付いていく。

「ロクロウ様は異大陸から来たと聞きましたがどうしてこの地に?」

「ン、嗚呼。簡単な話さ。異大陸でやりたい事が無くなったからな。だから俺は新しい敵を求めてこの重桜に来たんだ」

なるほど、と呟いて大鳳が母港の中を案内していく。

「人が見あたらないな……」

「新しい指揮官候補が見つからなくこの母港が使われておりませんでしたので……」

「なるほどな、この母港を使うときには新しい指揮官がいる、と……ン?」

ロクロウがそこで何かに気付いたように声をあげる。

「さて、一通り案内いたしましたのでまずは建造をしましょう」

「建造?」

「はい。建造ドックでメンタルキューブを消費して新しい戦力を増やすんです」

大鳳の言葉が理解できずにロクロウはそのまま首を傾げる。

「よくわからんが、それがやることだと言うのならやっておこう」

その言葉に大鳳が頷いて青く輝く立方体を手渡した。

「へえ、これがメンタルキューブというやつか……あっちでは見たことないな」

大鳳と一緒に建造ドックへ向かい、メンタルキューブを使用する。

「今回はこの高速建造材を使用しましょう」

カッ、と宙に浮いていたメンタルキューブが輝き始める。ロクロウが無意識に距離を取った。

だが、大鳳は驚く様子もない。これがどうやら普通のことらしい。

光りが凝縮し、人の形を形成する。

赤い瞳が輝き、白い髪を靡かせ少し奇抜な剣を右手に持つ少女。

「吹雪型駆逐艦の改良型、綾波あやなみです……よろしくです」

「早速、良い子が来ましたね……早速、海域に行きましょう」

「はい。俗に言う戦闘です」

「！」

ロクロウが待つていたと言わんばかりにニヤリと顔を歪ませる。

ロクロウ・ランゲツは“夜叉”だ。これは例えや比喻ではない。まごうことなき夜叉である。

強者との戦闘を好み、そのためなら手段は選ばない狂人。それが彼、ロクロウ・ランゲツだ。

だが、彼はあることに気付いていない。大鳳が“海域”と言った事を。

「ン、どこで戦闘するつもりだ？」

「海上ですよ。何せ、敵はセイレーンですから」

「俺はどうすればいい？」

「指揮官様は指示を出すだけで大丈夫ですよ」

その言葉にロクロウが張り上げた

「おいおい。俺はセイレーンと戦えると聞いたんだがどういう事だ？」
顎に手を当てて首を傾げる。

「ユウ少佐から聞いてませんか？ 指揮官様がセイレーンと戦えるのはもう少し先のはずなのですが……」

「……乗せられたな」

「え？」

「いや、なんでもない。気にしないでくれ。俺は指示を出せばいいんだつたな」

「はい、前衛が綾波。後衛がわたくし、大鳳という配置になります」

大鳳が頷くがロクロウがうん、と首を捻らせる。

「指示、と言われてもな率直に言うが俺はお前たちの戦い方を知らん」

そう言ううと大鳳がポンツ、と両手を合わせて笑顔で頷いた。

「それでしたら海域に向くのは後日にいたしましょう。その間に指揮官様にある程度の知識は教えますので」

その言葉にロクロウが言葉を詰まらせた。あまりそういうのを覚える気がないロクロウであるため顔を渋らせた。

そして大鳳が綾波を連れて母港へと戻っていく。

「海の業魔か……あまり、見たことなかったが……」

その後ろ姿を見てロクロウが虚空を見つめた。業魔とは色々戦ってきたが海の業魔とは戦ったことがない。何より、海の上となると戦いようがない。

「戦いたいが海の上で活動するとなると俺でも戦いようがないから……。セイレーンを陸こちに引きずり込めればいいが……」

顎に手をあててどうセイレーンと戦えばいいか悩み始めるロクロウ。そんな彼の背

後に狂刃が迫る。

太陽の光を浴びて輝く二振りの脇差がX字となってロクロウの首へと迫る。

ガキインツ！と火花を散らし金属音が鳴り響く。

「いい腕だ。だが、俺を殺したいんなら殺気を抑えることだな」

いつの間にか襲撃者の方へと振り向いていたロクロウが手に持っていた二振りの黒い小太刀を相手に見せてニヤリと嗤う。ロクロウが襲撃者の姿を確認した。

白く長い髪に白い肌。額からは二本の角が生え、金色の瞳がキラキラと輝いている女性。そして背には船の砲塔のようなものが複数展開されている。

その姿はまるで……。

「なるほど、お前がセイレーンか」

ユウ少佐から見せられたセイレーンと似た姿だった。二本の脇差を装備し、背には大きな太刀が納刀されていることを除けばセイレーンに近い姿を持つ。

「嬉しいぜ。お前達は海の上で活動する奴らだからな。こうやってお前たちがこつちへ来てくれるとなると俺が戦えるッ！」

言い終わると同時に腕をクロスして地を蹴る。両側から挟むように小太刀をセイレーンへとふるった。

キインツと甲高い金属音が鳴り響き、火花が生じる。ロクロウの小太刀を塞いだの

だ。だが、彼の剣はそこで終わらない。舞うように、弧を描いて刃がセイレーンへと迫る。

刃と刃が激しくぶつかり合う。セイレーンもロクロウも表情を変えずに攻防を繰り広げた。

「……！」

ロクロウが目を見開いた。セイレーンがロクロウの手から小太刀を弾いたのだ。

だが、ロクロウに驚く暇はなかった。セイレーンが頭上へと跳びクルリ、と身体を捻り回転させ、その勢いを力に脇差を振り下ろす。まるで鋏のように構えられた脇差がロクロウの頭部へと振り下ろされる。

「っー！」

ロクロウが素早く背にX字に背負っていた二振りの大太刀の内、片方の柄へと手をかける。

チャキ、とその大太刀の鯉口を切ってそのまま鞘から抜き始めた。

「——■っ!？」

直後、セイレーンが横へと吹き飛んだ。巨大な鉄の塊をぶつけられたかのように身体が吹き飛び、地面へと叩きつけられ転がっていく。

「指揮官様っ!!」

セイレーンが吹き飛んだ逆方向から大鳳と綾波がやってくる。

「指揮官様、お怪我は？」

ロクロウの元まで駆けつけてきた大鳳をロクロウは睨む。

「手を出すなよ」

そんな大鳳の心配を無視し、彼はそう言い放つ。彼は弾かれた小太刀を拾ってセイレーンが吹き飛んだ方向を見た。

「——■■っ!■■っ!!」

セイレーンが何かを言いながらロクロウを睨むがロクロウには理解できない言語だった。

「邪魔がはいって悪かったな」

キツ、と睨んでセイレーンが起き上がるのを待つ。膝を震わせながらセイレーンは起き上がる。それほどまでに先程の攻撃が強烈だったのだろう。

だが、ロクロウはそんなことは気にしなかった。このセイレーンはまだ力を隠し持っているのを睨んでいるのだ。

「さあ、死合おうか」

チャキ、と小太刀を構えてセイレーンと対峙する。だが、セイレーンはロクロウを睨

むだけで構えはしない。チツ、と舌を打ってその場から離脱する。

「……………」

その様子を見てロクロウが構えを解いて小太刀を懐へとしまう。

「今のやつの太刀筋……………」

まさか、な……………とロクロウが呟いた。

その男、業魔つき

—— 着任二日目 ——

早くも大鳳が指揮官の部屋へと侵入する。ゆつくりと音を鳴らさず抜き足指し足で指揮官が眠っているベッドへと近づくと近づく。

「指揮官さま。朝ですよ。起きてください——」

大鳳が静かにその声を掛けてベッドの布団を退けた。だが、そこにはいるはずの男がいなかった。

（指揮官様がいらない!? 一般常識的に考えて昨日寝た時間から考えてこの時間に起きる筈……!!）

汗を額に浮かべながら指揮官がどこへ行ったか考えを巡らせる。彼はここに来たばかりであり遠くへは行けないはず。ならばこの母港にいるはず。

（まさか、綾波あの子のところへ……そう。指揮官様は私ではなくあの子を……）

「ン、大鳳か。俺の部屋にやってきてどうしたんだ？」

「っ!？」

直後、なんの気配もなく大鳳の背後から声をかけられる。ギクリ、と肩を震わせそつ

と後ろへ振り返った。

「指揮官様、一体どこに……っ?!」

大鳳が言い終わるよりも先に大鳳が言葉を詰まらせた。大鳳の目の前に広がるのは男の肌。着物を上半身を捲っているロクロウの上半身裸の姿。

「どこについて……嗚呼。俺の日課さ。一日、素振り十万回するのが俺のな」

大鳳の耳にロクロウの声は聞こえていない。顔を手で覆い、指の隙間からロクロウの上半身を凝視している。

鍛え上げられた筋肉。そこには一切のたるみはない。引き締まっている筋肉に運動の後に出てくる汗でキラリ、と肌が輝いていた。

「どうした……?」

「な、なんでもありませんわっ!!」

大鳳が顔を赤くさせロクロウを避けてその先の扉へと向かった。バタン!と扉を勢いよく閉めて扉を背にその場にへたりと倒れ込んだ。

(指揮官様の裸……汗……うふふ……最っ高でしたわ……)

ニヤリ、顔を綻ばせ酷く歪ませる。見たものを恐怖させるような顔。大鳳が思っていた不安が打ち消され彼女の心が満たされる。

指揮官室にてロクロウは招かれる。指揮官用の制服があるとされたがロクロウは断った。

「今回は綾波と私の二人の特徴を教えましょう。まずは綾波、この子は駆逐艦と呼ばれる種類に入ります」

そう言つてホワイトボードに何かを書き込んでいく。

「彼女は基本的に魚雷を用いた攻撃が高く、動きも早いです」

そう言つて近接向きと書かれていく。

「そして彼女はブレードを用いた剣術も得意とします」

ほう、とそこでロクロウが興味深そうに呟いた。

「そして私は空母。空母は基本的に動きが鈍いです。ですが、その分装甲が高い。そして何より、戦闘機を使つて攻撃を用いるのが主です」

「戦闘機？なんだそれは……？」

「そうですね、…わかりやすく言えば遠距離攻撃に優れた鉄の鳥といった感じですよ」

「聖隷術か何かか……？」

「うゝん。口で説明するのは難しいので後で実際に見てもらったほうが早いでしょう」

さて、と大鳳が手を合わせて休憩を入れた。

「なあ、大鳳」

「なんでしよう?」

ロクロウが何かを考えた後にニヤリと笑って口を開く。

「なあ、綾波の奴と闘ってみたいんだがいいか?」

「大鳳さん、本当に指揮官と戦うの、です……?」

「指揮官様がそれをお望みななのよ。貴女と戦いたいとね」

はあ、と大鳳が不安を溜め息と吐いた。大鳳にとつては指揮官が一番。傷付くことも嫌だが、指揮官の思いを無下にすることはできない。嫌々ではあるがその望みを聞いた。

「嗚呼。どんな手を使っても構わないぜ!」

「……指揮官と戦うのは嫌、です……」

「おいおい、セイレーンと戦うお前達がそんなんでいいのか?」

「……セイレーンと戦うときは戦うのです。でも指揮官と戦う理由がわからないです」

「……なるほどな、それがお前の考えか。鬼神と飛ばれるお前もさすがにただの業魔は勝てないか」

「業魔……?」

ピクリ、と大鳳が眉を潜めた。綾波も首を傾げてロクロウを見た。

「なんだ、気付かなかったのか?俺はお前達の指揮官以前に業魔なんだよ」

右目を隠している前髪が靡く。

「っー」

顔の右半分が明らかに人間のものではない、黒と赤の禍々しい肌となっている。

「征くぞー!」

ロクロウの右目が赤く輝き、綾波へと急接近する。

「っー!」

ロクロウの右手から放たれる小太刀の突きが綾波の首へと迫る。ギイン、と綾波がギリギリでその刃の軌道を逸らす。

「さすがにこの位はやってもらわないとな!」

そして彼の剣舞が始まる。ギンギイン、と段々と綾波を押ししていく、

「どうした!そんなんじやセイレーンおろかさこらへんの業魔も倒せないぞ!!」

くっ、とロクロウの言葉に綾波は苦虫を噛み締める。相手は指揮官、されど業魔。 K

AN—SENの主であり危険な相手。

「無骨!」
フコッ

ドンツ！とロクロウが大きく足を踏み入れる。ロクロウの右目が一層輝き、彼の小太刀が血に濡れたいるかのように赤く煌めく。放たれる小太刀の突きが綾波の頭部へと目掛けて飛んでいく。

(殺られるのですっ！)

明らかに殺意を持った彼の攻撃に綾波の体が無意識に体が動いた。その場で体制を崩し、ギリギリのところでもろくの突きを躲す。

その様子にロクロウニヤリと笑うが綾波の目にはそれが見えていなかった。崩れていく体を支えるように左手で地面に手を付けると彼女の艷装の砲塔がロクロウの腹へと照準が合わされられる。

「——吹き飛ば、です」

無意識に放たれた綾波の無慈悲な一言と共に、ゼロ距離からの砲弾が彼の体へと放たれた。ドツ、という鈍い音と共にロクロウの体が吹き飛ばされ遠くへと転がっていく。

「指揮官様っ!!」

地面へと倒れるロクロウを心配して大鳳が彼の元へと向かっていく。仰向けに大の字で倒れる彼の元までやってきた。

「っ!!」

彼を起き上がらせようと触ろうとするがそこで手を止めた。彼は業魔。例え、KAN

—SENであれ業魔化する可能性はある。だから、触りたいのに触れない。

「アハハハハッ！今のは良かったぞ、綾波!!」

そんな大鳳の心配を気にせずガバツ、と起き上がり叫ぶ。面白いものを見たと言わんばかりの良い悪い顔。

「指揮官、様……?」

大鳳が大きく目を見開いてへたりと倒れ込む。あやのポカン、と口を空けて啞然としている。

「よし、ここまでにするか!」

そう言つてロクロウが小太刀を納刀する。業魔と言えどあの砲撃を喰らえば致命傷は免れない。

だが、彼はピンピンしている。それところが笑つているというのだ。

「指揮官、貴方は一体……」

綾波が彼の異様さに気付き息を呑む。

「ん、業魔だが……言つてなかったか?」

「さつき知つたのです」

そうかそうか、と言つてロクロウが頷く。

「まあ、別に隠していたわけでもないんだかな。でつきり見たときからわかつてるもん

だと……」

ほとんど人間と変わらない見た目をしてひと目でわかるものなんてせいぜい霊応力の高い人間や聖隷だけだ。

「私達では見分けられないのです。確かに私達KAN—SENは業魔や聖隷も見えるのです。ですが、私達は兵器。霊応力を持ち合わせていません」

「そういう存在ですので……霊応力がなかったため”穢れ”を感知することができません。ですので私達は見た目で判断するしかありません。指揮官様は人間に近い姿の業魔ですのひと目ではわかりかねません」

「なるほど、穢れは見えなくても業魔や聖隷の姿は見えるのか、変わった種族だな」

ロクロウの言葉に大鳳が種族ではなく兵器だと訂正する。

だが、その大鳳の言葉を否定してロクロウはこう言い放った。

「兵器は心を持たないぞ」

そう言った。その言葉に少なくとも二人は心を揺るがせた。そんなことを真正面からいう者はいなかった。

「さて、お前達には海域に向かつてもらおうかな！」

そしてロクロウは重苦しい空気を壊すかのように明るくそう告げた。

「なんだ、もう終わったのか？」

「はい。この近くの海域はセイレーンの小型艦ですので」

「それなら、俺から指示を出す必要はなかったんじゃないか？」

「そうですが、知識は有るに越したことはないですから」

少し苦笑いをする大鳳にロクロウはそれもそうかと納得する。そんな様子に何かを言いたげな綾波にロクロウが気付いた。

「どうした、綾波？何か言いたいことがあれば言った方がいいぞ？」

「指揮官、先程の戦い……綾波を殺す気だった、のです？」

静かに恐る恐る口を開く。綾波の勘違いかもしれないと自分で思いながら真実を確かめるために彼に聞いた。

「応。そうでもしないとお前達KAN—SENの実力が判らないからな」

ロクロウが否定することもなくキツパリと言い放った。その言葉に綾波は恐怖を感じ、大鳳は喜びを感じる。

自身のKAN—SENに遠慮なく殺す気で攻撃する指揮官に対しての不安と恐れ、自

身の指揮官がこれほどまでに強靱な精神と力を持つていることに対する期待と喜び。

お互いの心の中にそれぞれ感情が渦巻いている

綾波の頭の中では危険だと告げられ、大鳳の心の中には素晴らしいという言葉が埋め尽くされていた。

だが、当の綾波にとってはどうしようもない。あの戦闘で自身の砲撃を受けてもピンピンしているロクロウをどうにかする術はない。

それに背の大太刀を二振りとも抜かないということはあれでまだ本気ではないということになる。

あの大太刀二刀、まさか小太刀二刀流のように一本ずつ片手で振り回すのではないだろうか……。そんな、まさかと綾波はブンブンと首を横に振った。

それならば大太刀一刀の方が効率が良い。力も分散されずちゃんと刀も固定できる一刀の方が。

それがまさか本当に大太刀二刀流を使う指揮官だと綾波が知るのはまだ先の話……。

愛宕（姉）なるもの。

— 着任五日目 —

「九千九百九十九……一万！……良し、一万を十回目。これで終わりだな」

ふう、とロクロウが一息を吐く。木刀を肩に担いであたりを見渡した。

着任して日はあさく。そのせいか、この母港の人員も少ない。未だにロクロウと大鳳、綾波の三人だ。

「もう少し人員が欲しいところだな……」

ロクロウが悩ましげにそう呟いた。そんな彼の頭上に広がる青空に響き渡るかのような声が彼の耳に届く。

「指揮官様〜！建造がもうすぐ終わりますわ〜!!」

大鳳の声だ。日課である素振りを始める前にこの間、海域で入手したメンタルキューブを消費して建造へと使ったのだ。

「応！今、そっちへ行く！」

ロクロウが短くそう答えて着物を着直した。そしてロクロウは建造ドックへと向か

う。

最初は道に迷ったが五日もここにいれば少しは道を覚えてきて目的の場所までそれほど時間がかからなかった。

「さて、次はどんな奴が出てくるんだ？」

ロクロウが少し興味深そうに呟いた。建造されるKAN—SENは恐らくそれなりに力を持っている事と思われる。実際、綾波にもその実力はあるとロクロウは見抜いている。

そしてやってきた建造ドック。そこにいるのは大鳳と綾波、そして白い海軍服を来た長い黒髪の女性。

「あの方が指揮官？」

彼女がロクロウを見て首を傾げる。ロクロウは彼女の頭部に注目した。そこにあるのは黒い獣耳。それはまるで業魔になった人間に見えなくもない。

「ええ。ロクロウ・ランゲツ様ですわ」

「よろしくな」

「あら、可愛い指揮官ね。お姉さんの名前は愛宕あたごよ。気軽に呼んで頂戴」

「可愛い……？」

愛宕と名乗ったKAN—SENの言葉に綾波が何かを疑問に思ったか首を傾げる。

そしてジツ、とロクロウを見つめて再び首を傾げた。

「さて、んじやあお前達に海域に出てもらおうかな」

だが、愛宕の言葉を気にしていないかのように話を始めるロクロウ。ニツ、と笑いどこか期待するような笑みにも見えなくもない。

「指揮官様、その前に一つよろしいでしょうか？」

「吽。どうした、大鳳？」

「今朝、ユウ少佐からメールが届いておりましたわ。毒味はこの大鳳がすっかりとしておきましたので」

そう言つて大鳳が胸の谷間から一通の手紙を取り出し、ロクロウへと手渡した。

「何々……『拝啓ロクロウ殿へ 最近、貴殿の母港付近の森で見たことない業魔の目撃情報』が耳にします。可能であれば討伐を依頼します ユウ・タチカワより』」

ふむ、とロクロウが読み終える。

「裏面に追伸が書かれておりますわ」

「『追伸 それなりの報酬はさせていただきます』：見たことのない業魔か……興味深いな」

「その依頼どうするのです……？」

綾波が首を傾げてロクロウに問いかけた。

「そうだな……。お前達が海域に出ている間に俺がこの依頼を解決しよう」
どうせ暇だしな、と呟いてニヤリと笑う。どんな業魔なのか楽しみだと言わんばかりの表情が彼の顔に出ている。

「ではこうしましょう。私と綾波が海域に出て愛宕が指揮官の付き添いを」
「あら、私？」

その言葉に少し以外そうに愛宕が首を傾げた。

「ええ、残念だけどこれから行く海域は私しか場所を知らないのです。綾波も貴方もつい最近、建造されたばかりで場所が判らないからなでしょう？」

黒い笑みを浮かべながら小さく首を傾けて愛宕へとその表情を見せる。

「そう。なら、私は先輩のお言葉に甘えて指揮官に付き添いますわ」

ウフフ、と二人の間に火花が散る。その様子にロクロウは何も気にせず、綾波は冷や汗を浮かべる。

（綾波、この母港でやっていくとなると……。不安なのです）

「じゃあ、そういうことだな。任せるぞ、大鳳」

「はい。この大鳳、任せましたわ」

ペコリと頭を下げてロクロウへとお辞儀をすると二手に別れた。ロクロウと愛宕、大鳳と綾波と。

「さて、俺達も行くか」

母港に二人だけとなったロクロウが一通りの用意をすますと母港の外へと足を足を踏み入れる。

「行くって指揮官。その業魔の場所、わかるの?」

「いいや、わからん。とりあえず、近くの街で聞き込みだ」

そう言って街道を愛宕と二人で歩く。

「業魔の目撃情報か。意外だな」

「どうしたの?」

不意に不思議に思ったロクロウの眩きが愛宕の耳に聞こえた。

「いや、業魔を見たって言う奴がいるのが珍しくてな。十年前まではみんな見えていたがある日を堺にほとんどの奴が業魔が見えなくなったはずなんだが……重桜には霊応力が高い人間が多いのか?」

「そのことね。恐らく霊応力が高い人間はほとんどいないわ」

「なら、なんで業魔が見えるんだ?普通なら業魔の本来の姿が見えるわけでもないはずだが」

「重桜に張ってる結界にそういう術式が書き込まれてあるのよ」

「結界……?」

「ええ、普通の人間は業魔もセイレーンも見えない。でもそうなれば重桜に指揮官が着任した時、敵が見えないのは不便でしょ?」

「まあ、なんとなくわかるが……」

「そういうのも兼ねて上層部の人達がそういう結界を重桜に結界を張ったのよ。それに対魔士のようなことも重桜はKAN—SENを用いているわ」

「対魔士のようなことも?」

「ええ、対魔士はウエイストランドだけの存在でしたので私達、重桜はKAN—SENの持つ力で業魔を退治してきたのよ」

「へえ。ここ数年、重桜にいたが始めて聞いたな」

「まあ、そこら辺は一般人にはあまり知られていないのよ」

「そうだったのか。それにしても建造されたばかりなのに詳しいんだな」

「私達、KAN—SENはある程度の知識を与えられ建造されるのよ。それに私はお姉さんだから」

「そうかそうか。それも覚えておこう……ム!」

ロクロウが足を止め懐から小太刀二刀を取り出し構えた。それに続いて愛宕も腰に掛けていた黒い日本刀の鯉口を切る。

「愛宕、自分の身は自分で守れよ！」

「指揮官、それってどういう——」

「来るぞっ！」

愛宕が聞き終える前に林の中から複数の魔物が飛び出して来る。

「破ッ！」

「ッ！」

しかも現れた魔物は三体、姿もバラバラであった。

「妖狐ようこに山姥やまんばに小鬼こおにか……まあ、ここらへんの業魔は普通ぐらいか」

小鬼と妖狐がロクロウへと飛びつく、そして残った山姥が愛宕へと出刃包丁を振り下ろす。

妖狐の鋭い爪がロクロウの頭部めがけて振り下ろされる。ギインツ、とそれを小太刀一刀で軽々と弾きかえし、そのままもう片方の小太刀で切り伏せた。

そこに小鬼がロクロウへと小鬼を振り下ろす。

「甘い！」

ロクロウが一步後ろへ飛び退きながら小鬼へと斬撃を見舞わせる。だが、彼の攻撃はそこで終わらない。小太刀で印を描き、術を使用する。

「壺の型！」

かむら
香焰。小鬼を覆うほどの火の霊力が圧縮し爆発した。小鬼の業魔の身体は霧散して消滅する。

よろいどおし
「鎧通し!!」

そして今度は喰らいつこうと飛び出してきた妖狐に右手の小太刀を勢いよく腹部に押し付ける。この技はそれだけで終わりではない。もう片方の小太刀を押し当てている小太刀へと叩きつけることでその威力を発揮する。

叩きつけた際に生じる衝撃波が妖狐の体へと伝わり、体内を破壊する。思い切り吹き飛ばされた妖狐は力尽きて地面に転がると消滅した。

「手応えがなさすぎるな……。愛宕の奴は……」

ロクロウが業魔の余りの弱さに嘆くが連れの存在を思い出しそちらの方を振り向いた。

小さいお婆さんが出刃包丁を愛宕へと振り下ろす。

「うふふ、甘いわあ……」

キン、と左翼の艦装でその攻撃を弾いた。そして隙だらけの懐に狙いを定めていた右翼の砲塔が砲弾を射出。思い切り吹き飛ばされ地面へと転がり込む業魔。

起き上がろうとする山姥に愛宕はそんな暇を与えることはしなかった。大きく跳躍し、刀の鞘の鏑こじりを業魔の頭部へと叩きつけた。

「さようなら」

刀の鞘が頭部を貫き地面へと突き刺さる。愛宕がそう呟くと山姥の業魔が消滅した。

「やるな……」

その様子を見ていたロクロウが感心するように呟いた。初の戦闘でここまでやるのは流石とも言える。

ロクロウは改めてKAN—SENの戦闘能力を認識する。どれも業魔に匹敵するほどの強さを持つ少女であり、聖隷や業魔ではない。かと言って対魔士というわけでもない。かつて対魔士という存在がいたが殆どの人間はその存在を忘れかけてはいるが。

「建造されたばかりであそこまでの力……まるで聖隷だな」

ジツ、と愛宕の後ろ姿を見て呟いた。聖隷、自然の力を扱う種族。かつては対魔士に使役される存在であったが本当は太古から人間と共にこの世界に生きている種族。使役されていたのは十年も前の話だ。

そもそも本当の名前は天族^{てんぞく}。天界に住まうものの種族だったが大昔にこの地上に降りてきたのだ。

「まあ、今はそんなことはどうでもいいか」

「何か言った、指揮官？」

「ン、いや、なんでもない。それにしてもお前、強いんだな」

その言葉に愛宕が頬を少し膨らませてロクロウをジッと睨みつけた。

「指揮官、それはどういう意味かしら？」

「別に深い意味はないが建造されたばかりなのにやけに戦いなれしてるような動きだったからな」

「お姉さんはこれでもKAN—SENよ？ セイレーンと戦う為の存在。戦えるのは当たり前よ」

「そういうものなのか、KAN—SENというのは……」

そう言つてロクロウが街の方へと歩き始めた。その後を愛宕が着いていく。

「それを言うなら指揮官は何者なの？ 業魔と戦えるということは人間とは思えないわ。

聖隷？ それとも対魔士？」

「残念だがどちらも外れだ」

「え、じゃあ……」

「俺は業魔さ」

「!？」

ロクロウから出た言葉に愛宕が言葉を詰まらせた。なんていいか分からない。なぜ？ と聞けばいいのかそれとも大丈夫？ 心配すればいいのか……。

彼女にはなんと言つたらいいのか分からなかった。

「さて、街に着いたし酒場とかで聴き込むか」

歩いて数十分、街へと到着しロクロウが街を回る。宿屋の店主や酒場の店主などと言った情報が集まりやすそうな人の元へと尋ねる。

「珍しい業魔？んー、確かにそんな話は聞くが俺は見ることがないからなあ。ん、そういえばこの間、この街に来た傭兵がその業魔と戦ったって聞いたな…」

宿屋の店主が思い出したかのようにそう答えた。ロクロウがその傭兵の場所を聞き出す。

「ああ、あの業魔の事か…：それなら街を出て東の方の使われてない神社にいるよ。かなり、凶暴な業魔だったな」

「街を出て東、だな…：感謝する」

「それにしてもアンタもあの業魔と一目見たいなんて変わってるな」

「アンタも？」

「ああ。ついさつきもアンタ達と同じようにその業魔を一目見たいらしくて場所を訪ねてきた女がいたぜ」

「女？」

「ああ、赤い着物を着た長い黒髪の女だよ。すぐに早足でここを出てったぜ」

傭兵の言葉を聞いてロクロウと愛宕が互いに目を合わせて首を傾げた。

「業魔を一目見たい女か。まあ、何にせよ向かったほうがいいな」

「そうね。行つてその女性が業魔にやられてましたなんてことになったら最悪の事態よ」

その言葉にロクロウがだな、と答えるとすぐさま傭兵が言つていた神社へと向かう。立ちはだかる業魔や襲つてくる業魔を退けては斬り、ようやく目的の場所へとたどり着く。

「ここが目的の神社だな」

「誰もいないわね」

「嗚呼、人はな」

ロクロウが静かに呟いて小太刀を構えると奥の本殿へと見据えていた。その様子を見た愛宕も静かに刀の鞘に手をかけていた。

「■■■■■■■■■■!!」

人ならざる獣の声が空気を張り巡らせ、木々を揺らめかせ、大地を震わし、鳥達を怯えさせた。

本殿の部屋から青く輝く獣の双眸がロクロウの姿を捉えた。

「っ!?!」

ロクロウが目を見開いた。まるで銃弾の様に飛んでくる白い体がロクロウと衝突し

た。

(速いっ！)

寸での所で小太刀を交差させ直撃は避ける。だが、それでも勢いは殺す事かできず後ろへと吹っ飛んだ。

「指揮官！」

クルリ、と空中で体を回して体制を整えたと見事に着地するロクロウ。

「コイツは中々楽しめそうだな！」

再びロクロウが構えを取ってニヤリ、と笑ってみせた。

ロクロウ達の目の前にいるのは白い妖狐の業魔。それもただの妖狐ではないのが一目でわかった。

人間大の大きさを持つ白い毛の狐。そして何より特徴的なのは尻尾が九本もあるということだ。

「愛宕、援護を頼むぞ！」

その言葉と共にロクロウが白い妖狐、”白面九尾”へと接近する。それに対して白面九尾が青い狐火を複数射出した。

ロクロウをそれを素早く躲しては、小太刀で弾き、最後の残りの三発は跳躍して避けた。

「枝垂星！」
しだれぼし

ロクロウが上空から流星の如く斬りつける。だが、白面九尾はそれを複数の尾で自身の体を守る。

「愛宕！」

「ええ！」

このタイミングで彼女の名を叫ぶ。ロクロウの背後から響く轟音と共に砲弾が業魔の防壁を弾いた。

「翠波活殺！」
すいはかっさつ

ロクロウがガラ空きとなった胴体に斬撃を一閃。さらに遅れて鋭い真空波が業魔を襲う。

「まだだ！重ね陽炎!!」
かさねかげろう

さらに続けて鋭い突きを見舞わず。だが、それだけではない。いつの間にか先程と同じ位置へと戻っていたロクロウが二度、突きを放つ。

業魔に嘆く暇さえ与えないほどの手数とスピードで敵を斬り裂いていく。

「——瞬撃必倒！」

そして彼の右目が赤く輝き、小太刀が軌跡を描いた。斬り裂いていた右手の小太刀が業魔の腹部に当てられ……。

「取ったあつ！真——」

そして左手の小太刀をクルクルと回して右手の小太刀へと叩きつけようとしたその時だった。

「なにっ!!？」

炎の鳥がロクロウの体を吹き飛ばす。それは白面九尾の業魔のものではない。かと言つて愛宕のものでもなかった。

そこから考えられる可能性は一つ。第三者の乱入だ。

「チツ、新手か！」

「いけないわあ。その子に手を出そうとするなんて。その子は私の大事な大事な妹なの」

ロクロウが乱入者を一睨みする。赤い着物を着た長い黒髪の女性。その姿はまさに傭兵が言っていた女性の容姿とそっくりだったのだ。

「まさか……赤城^{あかぎ}……?」

愛宕が女性の姿を見てゴクリと息を呑む。一航戦の赤城。

「知り合いか？」

「知り合いというわけでもないけど私達と同じ重桜のKAN—SENよ」

「あら、一緒にしないでもらえる？ 私達は正規空母、貴女は重巡洋艦。その時点で違う

わ

赤城が愛宕の言葉を否定して更にはキツく睨む。

「同じとか違うとかどうでもいいが、なぜ邪魔をした？」

「あら、理由なんているかしら。この子は私の妹なのよ？」

そう言つて彼女は白面九尾の近くまでやってくるとちらりとその業魔を見た。

「なに……?」

「妹……まさか!？」

「———そう、正規空母の加賀よ」

もとに戻す方法なら一つある

白面の少女は幾度となく敵を葬ってきた。それが彼女の生きがいであり、本質なのだから。

破壊しては沈めて、燃やしては沈める。その繰り返しだった。

繰り返して繰り返して繰り返して……。

そんなある日、彼女達の指揮官が謎の死を遂げた。

流れ弾、暗躍、過労死……様々な噂があったが彼女は興味がなかった。あるのは姉と戦場だけ。

指揮官の死を機に彼女達は本部へと戻る。次の指揮官が見つからないまま時間が過ぎる。

徐々に時が流れるにつれ、彼女の闘争心が枯れていく。

いつしかこの灯火が消えるかもしれないという不安に駆られているのだ。彼女の姉はそれに気付けなかった。

彼女の心を満たす戦いがもう来ないかもしれない。そう思うと心の闇が彼女の心を

侵食していく。

こうして彼女は業魔となつていった。

「それで、お前はその業魔……妹をどうしたいんだ？」

ロクロウが赤城を睨む。彼女は言葉を詰まらせる。業魔となつた妹を追つてきたはいいもののどうしたらいいかわかつてないのだ。

「分からないわ……」

「だろうな。理性も残つてない業魔となつた以上、ソイツを斬るか……それとも……」

「っ、そんなことさせないわ!!」

赤城が式神を構える。赤城がロクロウを睨み返す。だが、そんな彼女の視線に物怖じげする男でもない。

「対魔士でさえ、業魔となつた者を元に戻すことはできなかつた……。なら、私はこの加賀とも一緒にいるわ! ずっと! ずっと!」

赤城が勢いよく式神を飛ばす。火の鳥がロクロウと愛宕に襲いかかる。

「指揮官が変なことを言うから彼女、戦う気じゃない!」

「力づくか! 面白い!!」

ロクロウがニヤリと笑い構える。愛宕の言葉を無視して。

「行くぞー！」

赤城へと接近して小太刀を振り下ろす。ヒラリ、とその攻撃をかわす。そして後退しながら炎の弾丸をロクロウに放った。

「！」

彼女の攻撃を横に移動して躲して再び接近する。ロクロウは小太刀で戦う超至近距離の戦士、赤城は艦載機を操って戦う支援型の空母。

攻撃の手を緩めてはいけないロクロウと近づけさせてはいけない赤城。

一見、赤城の方が有利に見えると思われる戦い。

放った戦闘機が火を噴いた。放たれた無数の弾丸がロクロウへと迫る。

「！」

だが、ロクロウは避けることはしなかった。足や顔、胸など急所にあたるはずの弾丸を全て小太刀で弾く。

「チイツー！」

それ以外の弾丸は体の至る所に掠る。ロクロウの速度は落ちる事はない。

すぐさま火球が複数飛んでくる。彼はそんなものに恐れることはなかった。なぜなら彼は業魔だから。

「参の型！」

小太刀で印を切り、水流を展開して火球のを全て防いで見せる。

「なっ！」

「瞬撃必倒！——この距離なら外しはせん！」

そして彼女の虚を突いて懐へと潜り込んだ。そして素早く左手の小太刀で彼女を斬り上げた。

「零の型・破空！」

浮き上がった彼女に右手の小太刀の突き上げ一閃が刺さった。

吹き飛ばされる彼女はすぐに起き上がる。だが……。

「勝負アリ、だな……」

いつの間にか彼女の背後へと回っていたロクロウが彼女の首筋に刃を突き立てていた。

「っ！」

赤城は歯を食いしばって自身の状況を理解する。力を脱力させ降参の意を示した。

ロクロウも彼女の首から小太刀を離す。愛宕もその様子を見てホッと安堵していた。

「加賀^{その子}を斬るつもり？」

キツ、と赤城が鋭く睨む。

「斬つてもいいがそうすると面倒だからな」

「面倒？」

「お前もこの業魔もKAN—SEN。俺達はセイレーンと戦う人手が欲しい。となればだ、最善なのはこの業魔を元に戻して尚且つお前達を仲間にするのが一番だ」

「元に戻す……？」

何を馬鹿など赤城が呟いて彼を再び睨む。だが、ロクロウは自身の言つた事を冗談だと言わない。

「嗚呼。実際、業魔になったヤツを元に戻す方法なら一つある」

「それは本当……？」

ロクロウはコクリと静かに頷いた。赤城はジツと彼を見つめる彼の言葉は半信半疑だった。

業魔になった者を元に戻す方法など今まで聞いたことがなかった。それにこれは自分を手籠にする算段かもしれない。

だが、それでも……。

「タダで教えてくれるってわけじゃないわね……」

妹を元に戻す方法があるなら小さな希望に手を延ばす。

「嗚呼。俺達の母港に所属してくれないか？」

「いいわよ。それで妹を元に戻す方法が知れるのなら」

「決まりだな」

ニツとロクロウが笑ってみせた。

ふう、と赤城がため息をついた。一仕事を終えて肩を撫で下ろした。

「終わったか？」

ロクロウの問いかけにええ、と答えて目の前の神社を見た。一見何も見えないように見えるがここには赤城の結界が張つてあるのだ。

一部の者しか出入りできない結界。当然、中には業魔となった加賀が閉じ込められている。

「街の方には近づかないように警告はしている。それにここへと続く道に愛宕が立入禁止の警告を作ってくれた」

「そう……。それで業魔を元に戻す方法って？」

「嗚呼。五大神のマオテラス破知っているか？」

赤城とロクロウが岩へと腰をかける。

「ええ、確か十年ぐらい前にカノヌシの代わりに現れた神様よね？」

「そうだ。そのマオテラスには穢れを消す浄化の炎を待っている。その浄化の炎を用えばお前の妹を元に戻せる」

「そんな力が……」

「ただ、マオテラスはミッドガンド王国領土の聖主の御座だ。ここからだとかかなり遠い」
「そうね……普通の船でも3ヶ月。私達でさえ1ヶ月半ぐらいはかかるわ。しかもそうとなれば燃料も沢山必要……」

真剣な表情で赤城がブツブツと呟く。

「そう考えれば貴方の母港に所属して良かったわ。ねえ、ミッドガンド王国領土に向かう燃料は出してもらえるの？」

「嗚呼。燃料が集まればな」

ただそれをアイツが許すかどうかだが……まあ、そこはなんとかするかと心の中で呟く。

「指揮官、看板を立て終えたわよ」

「応、お疲れさん。少し休むか？」

愛宕が帰ってきたところを見るとロクロウが彼女の体力を気にする。

「そうね。少し休ませてもらうわ」

「じゃあ、少ししたら母港へ戻るか……ン？赤城か、どうした？」

赤城がロクロウの袖を引っ張っていた。何か言いたいことがあるらしい。

「ねえ、貴方……いえ、指揮官はもしかしてなくても業魔なのかしら？」

「ン、よく分かったな。殆どのヤツは俺が業魔だってわからなかったのに」

「指揮官の先程の戦いの規格外な力を見れば流石に業魔って気付くわ」

「流石だな……それで？俺を討つか？」

「……そんなことしないわ。だって、指揮官はまだ本気を出していないもの」

赤城がそう言つて彼の背の大太刀を見つめた。恐らく彼が本気になるときは背の大太刀のどちらか或いは両方を抜いた時。小太刀だけで私達を奔走できる強さを待っているもそれはまだ彼のほんの一部の力に過ぎなかった。

「指揮官はなぜ指揮官になったの？その強さはどちらかといえば指揮官向きではないけど……」

「そんなことか。簡単な話だ。セイレーンと戦えると聞いてな……んで、母港にやって来たら指揮官になつてたんだ」

「セイレーンと戦える……？」

「嗚呼。だが、もう少し先になるっていう話を聞いてな……で、今は業魔退治をしている」

「変わった指揮官ね。自分から戦線に出ようとするなんて」

「そうか……?」

「ええ。そんな指揮官、一度もいなかったから」

「そういうものだろう」

「まあ、けどそう近いうちに戦えると思うわ」

「どういう意味だ?」

クスクス、と笑う赤城を見てロクロウが首を傾げる。

「さあ? 休憩ももういいでしょう。行きましようか」

赤城がチラリと愛宕の様子を見てそう告げた。それを聞いた愛宕も立ち上がる。

「愛宕も問題なさそうだし、母港に戻るか」

ロクロウが愛宕の方を見て頷いた。

「げっ……」

母港に着いて早々、出迎えていた大鳳が赤城と共に顔を見ると驚く。

まるで嫌なものでも見たかの様に声を漏らした。

「なんだ、お前達。知り合いか?」

「ちよつと前の母港でね……」

「なぜ、貴方が指揮官様と一緒にいるんですの？」

まるで大鳳の体から黒いオーラが発せられるかのような雰囲気を放ち、笑顔で赤城に問いかけた。

「そのことなんだが実はな……」

「ふーん。加賀が……。まあ、いいわ。指揮官様がいいというなら赤城をこの母港に置いてもいいですわ」

「というわけだ。これからよろしくな、赤城」

「ええ、よろしく、指揮官」

赤城が優しくにつこりと微笑む。

「これでかなり近いうちに指揮官もセイレーンと戦えますわね」

「どういう事だ？」

大鳳が放った言葉、それにロクロウが首を傾げる。それを見た大鳳が驚いて赤城を見た。

「赤城。貴方、何も言わなかったのね」

「……………」

大鳳と赤城のやり取りを見てロクロウと愛宕、綾波の三人が首を傾げた。

「実はですね。指揮官達が海へと出る装備を作っているのが赤城ですわ」

「何………?」